

談話室

第7回表面科学講演大会

岩澤康裕

東京大学理学部化学教室 〒113 東京都文京区本郷 7-3-1
(1988年1月11日 受理)

The 7th Conference on Surface Science

Yasuhiro IWASAWA

Department of Chemistry Faculty of Science
The University of Tokyo
7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113
(Received January 11, 1988)

日本表面科学会主催の第7回表面科学講演大会が1987年12月2日(水)、3日(木)の2日間、東京大学工学部(東京都文京区本郷7-3-1)で行われ、192名の研究者が参加し、最後まで熱心な討論が続けられ、非常に盛会のうちに会を終了した。参加者は年々増加し、学会の発展を物語っている。

講演大会は、日本表面科学会として唯一の会員の研究発表の場であり、講演大会の前身の討論会から数えると今回で7回目を数え、学会として重要な活動の場となっている。今回の講演大会実行委員長は私が務めたが、実際には難波理事(東京農工大)をはじめ多くの常任理事の方々のお世話のお陰で無事に開催された。特に、河津理事(東大)には会場を使うことにあたり多くの御尽力を頂いた。

周知の如く日本表面科学会は歴史も浅く、会員も物理、化学、機械など多分野に及び、さらに研究も基礎から応用へと非常に幅広いいわば混成コミュニティである。しかし、最近、多くの研究分野において“表面”の重要性が認識され、研究の飛躍的發展には固体表面の関わる諸現象の理解と制御、或いは積極的利用が避けて通れない極めて重要な研究課題となってきている。分野の一部或いは学際領域であったものがここに来て表面科学としてひとつのまとまった共通の主題となり、日本表面科学会が表面に関連する研究者の交流、情報の場としての中心的役割を果たしつつある。

このような流れを反映して今回の講演大会の発表件数は68件となり、前回の57件を上回り、前々回のおよそ2倍にまで増加した。従って、2会場での発表を平行して、午前と午後をfullに使用して行わざるを得なかった。

表面に関わる分野は非常に多く、できるだけ多くの研究者の参加を願って討論会の内容は昨年と同じ下記の分

野を網羅的に含むことになった。

- (1)表面物理 (2)表面化学(触媒を含む) (3)金属及び半導体表面 (4)微粒子の表面、界面 (5)高分子、生体の表面、界面 (6)薄膜、表面 (7)新材料、複合材料の表面、界面 (8)表面処理 (9)表面の分析及び評価

講演時間は討論時間も含め、15分を予定したが、議論が集中し討論時間が延長されるものが多かった。

講演は特別講演と一般講演に分かれ、プログラムは会誌“表面科学”第8巻第5号にとじこみの通りである。特別講演は2件あり、東京大学工学部の合志陽一氏に“走査型トンネル電子顕微鏡の展望”、およびNTT LSI研の宇理須恒雄氏に“放射光励起光化学反応の半導体プロセス技術への応用”について講演していただいた。いずれの特別講演も現在の表面分析技法或いは微細加工技術の最先端の研究と動向を含むもので、多くの聴講者を深く引きつけた。

一般講演は、上記9分野すべてで発表が行われたがその内訳を見ると、(1)3件、(2)12件、(3)12件、(4)1件、(5)3件、(6)14件、(7)3件、(8)4件、(9)15件、となっており、表面分析、半導体表面、金属表面の吸着、薄膜、及び触媒に関する発表が多かった。しかし、ひとつのみのセッションに分類できないものも多く、また上記の件数は一面的な分別でもある。

表面科学はそれ自体が今後の重要な学問分野であると同時に、学際的な分野でもあるため、表面の問題を各分野の方々が一堂に会して、それぞれの立場から議論する機会が本講演大会で提供しえたということは大変意義深く、さらに一層効率的有益な会として発展することが期待される。

講演大会第一日目の夕刻から、東京大学山上会館において懇親会が開かれ、約30名の参加を得て、親睦と交流に大いに盛り上がり、歓談に時間の経過を忘れるほどであった。

今回発表件数が非常に増加し、2会場が少し離れていた為、参加者は多少の不便を感じた向きもあったかもしれない。また会場の運営には座長をお願いした方々、河津研究室、岩澤研究室の学生諸君の骨折りがあり、ここに感謝する次第です。

表面科学の重要性がますます認識されるにつれ、日本表面科学会の責任と期待も高まってきて、会員の研究発表の場、会員同士の情報交換、或いは交流の場として講演大会の一層重要な役割が期待されます。今後也会員の皆様方の御参加と御協力をお願い申し上げます。